

日常生活における情報源としての学術論文 —大学生の Web 探索実験に基づく他情報源との比較から—

福原 綾美

これまで研究者や技術者の間でのみやりとりされてきた専門情報が、マスメディアを通して目にする機会が増えるに伴い、一般市民の関心を得るようになった。一方で、研究者がブログやホームページで専門情報を発信することが一般的になったり、学術論文のオープンアクセス化が進んだことで一般市民でも学術論文を手にする機会を得るなど、専門情報を様々なメディアから受け取ることが可能になってきている。本研究では、こうした状況の変化を受けた、一般市民のメディアの使い分けや学術論文の利用実態を明らかにすることを目的とする。そのため、Google 及び実験用に作成したポータルサイトを用いたウェブ探索実験と、その様子の観察・インタビューを行う。

被験者は、学群 1・2 年次及び院生それぞれ 20 名ずつとした。指定したテーマについて Google 検索を行ってもらい、さらに別のテーマについてポータルサイト探索を行ってもらい、各 15 分間で、調査者は探索中に被験者観察を行う。さらに、それぞれの探索前にテーマへの関心、探索後には利用したメディアを選んだ基準等をインタビューした。

メディアの使い分けについては、偏りなくあらゆるメディアが利用されていた。ただし、自分自身の関心とサイトの内容とが一致するサイトであっても発信者を確認し、マスコミや公式サイト、学術論文は見るが Twitter やブログは避ける人も見られた。これは、Twitter やブログは個人の意見を自由に発信したものであるため、信頼度が低いと思われることが理由と考えられる。また、マスコミや公式サイトを閲覧した後に参考意見として読まれる傾向にあり、Twitter やブログは情報源として優先度が低いメディアであるといえる。マスコミや公式サイト、学術論文を利用する場合は、まず一般向けの説明が得られるマスコミを閲覧して概要を掴み、それからより詳しい公式サイトや学術論文を選ぶ傾向にあった。さらに、Wikipedia もマスコミや公式サイトではないが多くの人々が最初に利用しており、概要を掴むためのサイトとして、信頼を得ていると考えられる。

学術論文の利用については、今回の調査での利用者も多く、学術論文は関心が持たれているだけでなく実際に利用されるメディアであることが示された。学術論文は、「正しい情報が得られるはず」という期待が持たれており、マスメディアに比べても情報の信頼度が高いと考えられている。しかし、「難しそう」「すぐには読めなさそう」などの心理的なハードルの存在もうかがえ、抵抗なく利用できるものではないことがわかる。

今回の調査から、多様なメディアがそれぞれ持たれているイメージを元に使い分けられていることがわかった。その中にはこれまで研究者の間でのみ利用されていた学術論文も含まれ、難しいが正しい情報が得られる信頼出来るメディアとして、既に情報源の 1 つと捉えられ始めているといえる。

(指導教員 松林麻実子)